



Title	主観・客観・経験：アドルノ哲学の射程について
Author(s)	河原, 理
Citation	年報人間科学. 1996, 17, p. 195-217
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/11797">https://doi.org/10.18910/11797</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

## 主観・客観・経験

—アドルノ哲学の射程について—

河原理

### 〈要旨〉

アドルノの批判理論はしばしば、その文化産業批判の故にエリート主義として非難される。更にそれとどまらず、彼の理論は時代遅れなものとして、あげつらわれもある。つまり、アドルノは主観・客観という枠組みから踏み出しができない、というのである。そうした通例の批判に対する反論こそが本稿の目指すところである。

アドルノの文化産業批判の核心は単なる時代診断ではない。彼の議論は「啓蒙」によって産み出された、カントから実証主義まで包み込むような問題構制を、弁証法的に微細に解き明かすことに基づいているのだ。そのような連関を踏まえた上で、アドルノが明らかにするところの、カントによる超越論的主観の基礎づけの二重性格は取り上げられることとなる。そしてこれをもってアドルノは、いわゆる主観の優位を突き崩し得るようなカント読解を試みるのである。

アドルノの議論運びは、周知のように、複雑極まる、一読しただけでは内容を把握すること困難なものである。為に、本稿では議論を「経験」とい

う概念に局限したい。それというのも、アドルノはまさしくこの経験という概念の内で、彼特有の多義的な言い回しを用いて、「客観の優位」に出会い得、「和解」の可能性を感じし得るような道を探っているからである。

### キーワード

T h · W · アドルノ、主観、客観、経験、文化産業

本稿は、哲学者、社会学者にとどまらず、文化の問題域にまで踏み込んでその思想を開拓したテオドール・W・アドルノ（一九〇三—一九六九）が我々に遺したもの吟味することにより、彼の批判理論の射程を探つてゆこうとするものである。彼の文化産業批判は、エリート主義として、ともすれば冷笑をもつて迎えられたりもする。また彼が主観—客観という図式を固持する為に、現在では時代遅れであるとの論難もよく聞かれるところである。しかし彼の批判は現在では、まったく的外れなものとかたずけられてしかるべきものと言えるのか。この問いに、主に『否定弁証法』を中心に、彼の仕事を究明する」として答えてみたい。

### 1. 主観と客観の逆転

アドルノによれば、主観と客観は、現代社会の中で、その「眞の」姿とは逆転した形で現象している。アドルノの著作を読む場合、主観—客観という概念の中に、認識論的な意味での認識者とその対象というばかりでなく、科学的な意味での主観的—客観的という含みをも見て取る必要がある。この二項は、そうした重層的な意味を孕んだものであるということを我々は頭に入れておかねばならない。認識論的には、それは今述べたように、われと我に対するものである。すなわち、自我と対象である。科学的には、個人的である」とと普遍妥当的であることがある。すなわち、個人と超一個人である。認識において主観は確たるものとして保証されておらねば認識

の真正さは保たれない。一方、科学においては、主観的であるとは、曖昧であるとの謂いであり、そのような主観的ファクターが厳しく排されることによって学的厳密さが保証されることになる。このように、一方で真正さの支点でありながら、他方ではまさにそれ故に厳密さを損なうものである「主観」。アドルノのテクストはこの相反する二項から紡ぎ出されており、一読しただけではその意図するところを読み解くことが困難である。そこでまず、アドルノの社会診断を概括しておこう。それにより、彼の思考の文彩が判然としてくるであろう。

アドルノは「主観と客観について」というエッセイにおいて「う述べている。「もちろんこれは観念論が最終的には承認するだらうことなのだが、超越論的主観はある意味で、諸々の心理的個人——そこから超越論的主観は抽象されたのであり、またそれらは世界の中ではほとんど言うべきことのないものであるが——よりも現実的であり、人間の実際のあるまいとそれによって形成された社会にとってみれば、より規定的である」（GS10 745）。超越論的主観の方が経験的主観（心理的個人）より現実的であるというのは、「生きた」経験をする具体的な主観を推した（abstrahieren）「満場一致の事柄」（ND 172）を鶲鶴返しするだけの抽象的主観が広く世界を覆つているというアドルノの時代診断に拠っている。また、超越論的主観（一般に妥当するもの、超一個人）の方が心理的個人より規定的であるというのは、超越論的主観という統制的機能によってその満場一致になる筈の事柄が予め定められているという次第による。

だからこそ」の世界の中ではやむべく心理的個人は消え失せてしまつておる、人間のやるまい（Verhalten）は、現実の世界の中で抑制（verhalten）されてゐるところだ。そして現実の社会に存在するところの超越論的主觀が——それは普遍妥当的なものである筈なのだから——、「客觀的」であることになる。

しかしここの「客觀的」というのは、アドルノにとってみれば、「主觀的」なものである。それは超越論的「主觀」の意味での、「主觀的」といふばかりではなく、むしろそれが胡散臭いものであるという意味でそうなのである。つまり先に見た、「科学的」ベースペクティヴを採った場合に言われる意味での「主觀的」なのである。

普遍妥当的なものをアドルノは、通常の言ひ回しとは逆に、「主觀的なもの」として呈示する。このような表現法を見究めて初めて、我々はアドルノの思想的核心に触れることができる。「あまりに主觀的」であると反対を受けることは（眞の意味での）「客觀性」のメルクマールになるといふ発言（MM Nr.43）がなされるのも、抽象的主觀の蔓延という批判的視点が在ればこそなのである。

り、その核心に達する為の導きの糸となるのが、如上の逆転現象である。

この議論の対象である主觀と客觀の逆転現象という主題は、かの悪名高き「文化産業論」の中軸となるものである。そこで次に、『実証主義論争』序文と『啓蒙の弁証法』を基に、この逆転現象を文化産業批判との関連において吟味しておこう。こうした考察を通じて、アドルノ思想の核心部に迫ってゆきたい。

## 2. 「客觀性」による媒介

まず初めに言つておかねばならないのは、アドルノにとって、客觀の主觀への還元こそが実証主義を最もよく言い表す、ということである。そしてこれはカント哲学における、カテゴリーによる質料の包摂という思想をより過激にしたものとして捉えられよう。アドルノが文化産業として考えてゐるのは、いやした還元を一般の「文化化」のレヴェルで広く世に覆い尽くさせ、「客觀的」なものとして蔓延のを促進したものである。彼にとっては、カント哲学や実証主義と現代の文化産業とは連続したものなのである。この視角を見落とせば、彼の文化産業批判の起爆力は失われる。そして、そこに残るのは単に一定の芸術に対する嫌惡だけ、ということになる。

『啓蒙の弁証法』の「文化産業」の章に散見されるように、文化産業はジャズや映画によって代表されるとアドルノは考えた。しかし、それらが想像力を萎縮させ、感性を鈍麻させ、盲目にするとい

う彼の見解は、現代のジャズや映画に一律に当てはまるものではないであろう。エリート主義として一蹴されがちな彼の文化産業批判はしかし、このことによつて、無視されがちなるべきものだとまで証明されたわけではない。彼の批判自身は、その核心において未だ妥当し続いているように思われる。では、彼の批判の潜勢力は、いかなる点で未だ有効であるのか。文化産業批判の射程はどこまで拡がつてゐるのか。

『実証主義論争』序文においてアドルノが頻りに繰り返すのは、主観は常に既に媒介を受けていたことである。何によって媒介されているのかというと、社会、全体性、哲学的には *Unwesen*とも言われるものにである。

このアドルノの社会概念（同じことは全体性や *Unwesen* の概念についても言える）だが煩瑣を避けて、このでは社会を代表として述べるに留める）について一言を付しておかねばならない。それは、弁証法理論は「社会」というものを単独に取り扱うのではなく、という点である。個人が社会によつて媒介されているばかりでなく、社会が個人という成員から成っている限り、社会をそうした絡み合いで抽出してきて、それだけを分析しても意味がないというのが批判理論の視点なのだ。実証主義社会科学との違いについて語ると、

この考え方（実証主義社会科学——引用者註）にとつては、社会といふものは社会化されて社会的に行動する諸主体の静力学的につきとめられ得る、平均的な意識もしくは無意識のことであつて、

諸主体がそのなかで動く媒体のことではない。この構造の客觀性——実証主義者たちにとっての神話的遺物——は、弁証法理論によれば、認識主觀的理性のアприオリである。認識主觀的理性がこのアприオリを解するとすれば、認識主觀的理性はその構造をそれ固有の法則性において規定せねばならないのであり、概念的秩序の処理規則に則つて自らの立場で仕上げてはならないだろう。

(PS 14f.)

こので語られる社会構造とは社会と個人の「間」で繰り広げられる事態そのものなのであり、つまりは「媒介」である。そしてこの媒介の内で起る」とを見据えてゆくというのがアドルノの終始変わらぬ態度であった。認識主觀の用意する図式に適うように素材を加工し、自らのカテゴリーの内で矛盾なきものとして象られた対象にだけ関わることをアドルノは断固として拒否する。<sup>(2)</sup>

こうした媒介を論究することこそが、文化産業批判の核心である。單に文化産業を批判するのではなく、それを生み出し、それを促進させた背景を探ることにこそ文化産業批判の矛先は向けられている。それ故、この批判は、哲学的にはカント批判、マルクス主義的には価値論（使用価値と交換価値の区別）への言及を伴うものとなる。

先に、アドルノにおいては文化産業とカント哲学とが連続したものとして捉えられると言つておいたが、それは主觀的能力の麻痺を助長させる文化産業と、その基盤となつたカント哲学という関係で

示される。

カントのいわゆる「ペルニクス的転回」により、真理の後見人の座はカントの有名な「我れ思う」という超越論的統覚、すなわち超越論的主觀に移された。問題は、「みずからを引き離して対象化する主觀性が、自然の全体的女王を僭称し、支配關係を忘れてつけあがり、支配關係を支配者による被支配者の創造へと解釈し直した」(PS 30)ことなのである。ここでの支配關係とは自然によって支配される人間という形態の支配である。そしてその状態を脱け出る為に、人間は主觀と客觀の間に距離をとつたのであるが、しかし自然支配から逃れるその方途は、人間が支配者となるために被支配者を作り出すというものであり、主觀—客觀關係で言うと、客觀を対象化して概念的に處理することに繋がるものであった(vgl. DA 29f.)。「人間を自然の暴力から連れ出す一步」といふに、人間に対する体制の暴力が増大してくるという状況があり、「その不条理さが、理性的社会の理性を、陳腐なものにすぎないとして告発」(DA 56)している。理性的社会の理性こそが神話なのである。

しかし『啓蒙の弁証法』では、こうした状況がカント哲学の登場によつて強固なものとなつたとしても、その本質は早くもアレニアニズムから西洋に根付いていたとも述べられる。アレニアニズムは「概念と事態とを分離して客觀として規定するやり方、つまりホーロスの叙事詩のうちにすでに広くひろまり、近代の実証科学のうちで転化をとげる客觀化的規定の原形態」(DA 32)なのだ。そして、ここでの「客觀化的規定」が、カント哲学によつて強化され立つ、「抜け道のない永遠に同一の世界」として批判に晒されるものである。しかし彼の視角からすれば、この同一性に覆われた世界というのは、自然から距離をとる」といふ、無理矢理もぎ取られたものなのだ。「それだけで存在する、「純粹な」、つまりみずから生き生きした経験を疎外した主觀」(PS 30)といった言葉がそれを表明している。そしてこの疎外された世界が、文化産業の蔓延する(超越論的主觀が客觀的となつた)現実世界の写し絵となつてゐるわけである。

それ以上に、アドルノにとって重要なのは、主觀性といふものは、「本當はつねにまた客觀でもある」(ebd.)といふことである。科学主義的分析が導く所与は、もはやそれ以上遡及不可能であるという——認識批判的に要請された——最終的な主觀的現象はそれ自身が、主觀へと還元される当の客觀性の貧弱な模像なのである」(PS 40)。客觀としての主觀については後に論ずることになるのだけれど、では、アドルノが実証主義における主觀概念を批判するにとどめず実証主義がそのような主觀を実体化していくとまで論を進めていふことを指摘するにとどめる。

マルクスについて言えば、文化産業に擄め取られる」との宿命的、不可避的性格を解明する為の基礎的思想をアドルノに付与した者としてその名を挙げることができよう。アドルノが次のように語る内には、マルクスの影がある。ひとは「主觀的にヘ利潤動機／によって導かれているかどうかにかかわらず、没落したくないならば、抽

象的な交換法則に服従せねばならぬ」(PS 21)。

マルクスにおいては、「交換」といふことで分析されたのは次の

ようなものであった。すなわち、使用価値と交換価値が切り離され、交換可能なものとなる為には量的なものとして労働が捉えられねばならない。そしてその結果、商品に物神的性格が貼り付くことから物象化が起る。つまり、マルクスにおいて等価交換は、特殊資本主義形態の内で現れ、物象化を惹き起す「元凶」であるとされているのだ。しかし、アドルノがしばしば言及する等価交換にはマルクスとの決定的な差異が存在する。それは、アドルノにおいて、そうした事態が人類の原史から存在してゐる点である。それ故、カント哲学以前に、神話時代より以前から既に、啓蒙の弁証法は始まっているのだ。

質を消去する」と、つまりその機能への換算は、合理化された労働様式を通じて科学から一般大衆の経験世界へと伝染する。今日の大衆の退歩は、自分の耳をもつて聞く「えがたいものを聞き、自分の手をもつて把えがたいものに触れる」とができない無能やのうちに現れている。これは新しい眩惑形態であり、征服された各種の神話的眩惑にとって代わるものである。人間は：互いに平等な、たんなる類的存在にされてしまう。互いに話をすることのできない漕ぎ手たちは、工場や映画館やコルホーツでの近代の労働者と同じく、誰も彼も同じ拍子につれて動くように拘束されてくる。…労働者の無力は、たんに支配する者の謀略だけではなく

「…」の産業社会の論理的帰結なのである。(DA 53f.)

文化産業といふのは、「啓蒙」の現代的形態といふべきである。主観と客観をいかしまにするのは、等価交換による量化による原因である。そして、いやした状況に入り込むことが強制されているというのが我々の現況だというのが、アドルノの診断である。「もし没落したくないならば」そうした渦に巻き込まれないと得ず、主体的な意志を持つことが稀薄となる個人は文化産業にますます搦め取られてゆく。これが先に述べた、自然による支配から逃れる為に人間の内に支配—被支配関係を移転することが、逆に人間に對する暴力に転化してしまうという啓蒙の弁証法の「不条理れ」なる問題構制における宿命的性格を語り表しているのは間へまでもない。

欲求の主体は「生産諸力の技術状況によって初めて」といはばかりでなく、生産諸力が機能する経済的諸関係によっても」(PS 21) 予め形成されてくる」というマルクスの遺産を継承しながら、哲學的に考察し、認識主観の実体化を厳しく批判するアドルノ。彼の中では、マルクス主義と哲學が底流している。そしてこの二つの流れは「主觀と客觀の逆転」という主題において交差する。

アドルノが主觀と客觀の逆転現象について論述する際に心に留めていたのは、社会には眩惑閾閾が広く行き亘っており、それを「文化産業」が強化するということだけではないのである。それは、主体の確立の問題、つまり主体が主体として確立されるといつてもそ

れがいかに歪められた形で、しかも不可避的に行われているのかと  
いう問題を提起するものもあるのだ。それは、現代の時代診断ばかりではなく、主体の成立史にまで視野に取めて、そうした歪曲を余儀なくさせた元凶を探ろうとするものなのである。それ故、現代の「文化」における時代診断としては全面的に肯定できないまでも、文化産業批判自体の核心は、「文化」状況の変化をもって一語の「下に退けられるものでもないのだ。更に、主体の確立の問題として、現在においても有効な批判の基準として働き得るものであろう。」こうした問題意識をより明快に表しているのが、次の二文である。

諸々の事実を媒介するのは、この事実を前形成し、掴み上げる主観的メカニズムであるというよりはむしろ、主観が経験し得るものとの背後の主観に他律的な客觀性である。この客觀性は、第一に列せられる主觀的な経験領域にとっては拒まれるものであり、その領域に先立つていて。現在の歴史的段階の上に立ち、現行の言説に則つて、余りにも主觀的に判断されるところでは、主観は大抵、オートマティックに満場一致の事柄 (*consensus omnium*) をただ機械的に反復するだけである。(ND 172)

主觀によって構成されたものであり、主觀による媒介を受けていることになる。しかしあドルノは、現状はその逆であると言つ。媒介を受けているのは主觀の方なのである、と。しかし、より重要なのはその「客觀性」というものが「眞の」客觀ではないという点だ。こゝでの「客觀性」は、「満場一致の事柄」でしかない。アドルノの視点からすれば、そうした「客觀性」による媒介を受けているにも拘らず、自我の確立を目指し、主体からしかものを見ようとはせず、<sup>①</sup>自我の内に閉じこもるゝことで盲目化してゆくことだ。問題はある。そしてこれが、文化産業の問題とパラレルであるのは言つまでもない。予めカテゴリーによつて決められた通りに対象を構成する」と、一般に受け入れられている事柄を機械的に反復するだけである」と。そこにこそアドルノの批判的視線は向かつていて。彼の批判は時代診断であると共に、対象構成的主觀の確立への批判ともなつていて。

こゝの二重の意味を持つ「客觀」による媒介という事態について、アドルノは次のように簡潔に述べてゐる。すなわち、「主觀が主觀となることを妨げる、主觀の中の客觀化されたものの優勢は同様に、客觀的なものの認識をも妨害する」(ND 173)。こゝでの「客觀」という言葉もかの重層構造を孕んでいる。「客觀化されたもの」というのが、こゝでの「満場一致」に相応するものであらう。その反対に「客觀的なもの」とは、「眞の」客觀、すなわち「客觀の優位」の意味での客觀を指してゐると思われる。現代においては、主觀は「客觀性」 = 「客觀化されたもの」によつて媒介されており、その

意味で「眞の」主觀ではない。だが、もちろん「客觀による媒介」が問題なのではない。主觀は客觀に媒介されることが必然である。

問題はその客觀が「眞の客觀」ではない、という点である。<sup>(5)</sup>更に、そうした趨勢によつて主觀の能力は委縮してしまい、それが「眞の」

客觀の認識を妨げてゐることだ。しかし、アドルノがそのためには絶望するというわけでもない。「否定的なこと、つまり精神にとっては同一化を手段とする」ともって和解が失敗に終わつたといふこと、その優位が成功しなかつたということが、それ自身の脱魔術化の原動力に変する」(IND 187)と、同一性の哲学を打ち破る可能を示唆してゐると同じことがここで「客觀と客觀の逆転、そして客觀による主觀の媒介についても言えるのである。アドルノは、そうした暗闇の内にこそ一条の光を見出そくと手探りする。

アドルノの時代診断は、誤てる主觀の遍在(=「客觀性による媒介」と主觀の能力の委縮である。しかし、この現状がいかに牢固としたものであるとしても、この事態を癡視することにより、「和解」の可能性へ続く道は開かれるとしてアドルノは言つ。否、そこにしか彼は希望を持つことができなかつた。シエーマによつてデータを静力学的に処理するとして実証主義を批判し、社会を突き動かしてゐる動力学そのものを見据えなければならないというアドルノの姿勢は、ここから出来するのだ。

さて、このようにアドルノが用いる「客觀」は、様々な意味を孕んだものなのだが、それでは主觀の方はどうであろうか。当然ここにも、「眞の」主觀と呼べるものがあるだろう。この強調した意味

での「主觀」という言葉を、次に吟味しよう。

### 3. 「経験」について

アドルノは、「眞の」主觀について明快に述べてはいない。明晰判明な定義づけを避けて、間接的に対象に迫つてゆく、というのが彼の戦略だからである。しかしここでは、敢えてアドルノに逆らつて、的を経験という観点に絞り、より判りやすい形で彼の主觀概念を解き明かしてゆきたい。<sup>(6)</sup>

アドルノの主觀概念はカントのそれとの対比の内でもつとも鮮明に浮かびあがつてくるであろう。そしてこれは、主觀の確立という問題、ひいては(主觀の)同一性の問題を伴うものである。そこでカントとアドルノにおける主觀の同一性についての相違を整理しておこう。

アドルノは、カントの有名な「我れ思はは私の一切の表象に伴い得なければならぬ」という命題における「私の」こそが、「我れ思は」という超越論的統覚を支えているのだと考える。アドルノが言わんとしていることは、端的に言えば次のように解釈できるであろう。すなわち、「我れ思は…」という論理的契機と「私の」という心理学的契機が相互補完的に絡み合つてこそ同一性は成立するのだということ、その結果、論理的普遍性を得る為にはどうしても、個別的自我の経験を経ることが余儀なくされる、という風に。そこで、次に「我れ(Ich)」と「私の(mein)」という二つの「主觀」

の在り方を、特に後者の個別的自我を中心にして、論究してゆこう。

アドルノの議論は、このように、第一点。アドルノによれば同一性という術語は近代哲学の歴史における重要な意味として、「人格意識の統一」、すなわち、一つの「我れ」がそのあらゆる経験において同一物として在り続ける」(ND 145) ということを表している。そしてこの統一を言い表すのが、カントの「我れ思う…」である、ということ。第二点。そこで同一性とされるのは、主觀と思考対象、つまり客觀とが相同であるといふことなのであり、それは單なる  $A = A$  やしがない、といふこと。この二つの点によつて、この「論理的普遍性は、思考についての普遍性として、それなくしては普遍性が成り立たないであろう個別的同一性に結び付いてくる」(ND 145f.) といふことが明らかになつたとアドルノはその議論を展開していく。これをより具体的に言い換えるといふと、個別の意識、つまり「心理学的契機」によって生じるところの「個別的同一性」、すなわち時間継続を通じた一連の経験における個人の同一性が基本ならなければ、「我れ思う…」という命題で表明される論理的普遍性は成り立たないのである、と。

「心理学的」意味での同一性についてはアドルノは、年老いた者が過去を思い出すというエピソードを持ち出して説明する。そこでは「想起される自我、かつてそうであった自我、そして潜勢的に再びそれ自身となる自我」(ND 157) は、「ある種の他者、つまり他人 (ein Anderer, Fremder)」なのである。そしてこれが「同一性の論理的問題構制の内にまで保存せられる」(ebd.) 同一性と非同一性

との相互並存として呈示される。

時々刻々と移り変わる瞬間瞬間に内に主觀は存在するわけだが、現在の人格は過去の人格と完全に同一なものと見なすことができないとアドルノは言うのだ。縦時の経験を通して各人格が「同一性」を保つ保証はないのであり、そこに連續性があるにしても、過去の自分は他者とも言えるものとなるのである。統一を保つていながらも、もはや過ぎ去つた還らないもの。同一でありながらも非同一なもの。このように、可能的経験といふものが、純粹悟性概念の「客觀的実在性が、唯一基づき得るもの」(A. 95)<sup>(9)</sup> に他ならないのであれば、そのことによつて、超越論的主觀の同一性は確固としたものであるといふ譬喩が覆る危険に絶えず晒されていることになる。勿論、この「かつての自我」についての考量は特に目新しいものではない。重要なのは、それを内なる他者、内なる非同一性 (あるいは客觀と言つてもよいだらう) として捉え返すアドルノの視角であることをここで確認しておきたい。つまりアドルノから見れば、主觀はその優位を覆す爆弾を抱えていることになるのだ。「ある経験的な意識、すなわち生き生きとした自我のそれとの関係がまったくないのなら、いかなる超越論的な、つまり純粹に精神的な意識など存在しないだらう」(ND 186)。自立した主觀なるものが、その安定を誇ることはもはや許されない。そしてここに、同一性の哲学を転覆させる微かな希望をアドルノは感じとつた。

さて、こうしたアドルノにおける主觀概念の二重性を念頭に置きながら、主觀と客觀の逆転という我々の問題に立ち返つてみてみよ

う。『「」マ・モラリア』でアドルノは「主観的なものと客観的なものという概念は、いつの間にか完全にさかしまになってしまった」と語っている。つまり、「見識ある人々」が「主観的」と断ずるものは、「問題になっている事柄に特有の経験に踏み込んで行き、その事柄に関する判断上の合意を放棄し、対象そのものに対する関係を、対象を熟視したことすらない（まして考察したことなどない）連中の多数決に取って代える行き方」（MM Nr.43）であると述べ、しかしこれこそが真に「客観的なこと」ではないかと反問している。つまりは、ここで述べられたような「経験」に直面してゆく態度を採る主觀こそが、「眞の」主觀と呼べるものなのである。

「これまで我々が見てきたところによると、アドルノの「主觀」概念には二つの側面があった。その二つは、カントの言葉を使うなら、「意識一般」とそれに対するアンチと解することができる。」その後者は個人的経験に基づいた、一般に抱摂されることのない意識と言えよう。そしてこれこそが「眞の」主觀と我々の呼ぶものなのである。アドルノのテクストにおける「眞の」主觀という概念を理解するためのキー・ワードは「経験<sup>(1)</sup>」である。そしてこの経験に向い合うことによってこそ、「主觀の優位」は、あるいは観念論、同一性の哲学は克服される、とアドルノは考えた。

しかしこの「経験」は、決して「科学的経験論の意味で使われるのではなく、すべての芸術的で知的な、経験したものへの反省をも含んだ、我々が日々経験するものの総体<sup>(2)</sup>」として用いられる概念だということを頭に入れておくことが必要であろう。つまり、主觀と

客觀が共に重層構造に包まれた概念であったように、経験というのも二重の層を持つた概念なのだ。そして「科学的」というレヴェルでの経験ともう一つの経験を、『プロレゴメナ』における「経験的判断」の領野に限わりつつ考察したのが、アドルノに多大な影響を与えたW・ベンヤミンの初期の著作である、「来たるべき哲学のプログラム」<sup>(3)</sup>だ。

カントの認識概念においてきわめて大きな役割を果していたのは、もちろん高尚めかされてはいるものの、感官を介して諸々の感覚を受け取り、その感覚に基づいて自らの表象を形成している身体兼精神としての個別的な「私」という見方である。<sup>(4)</sup>

そしてこの「私」の「経験」というものは、「意味の零点、意味の極小値<sup>(5)</sup>」にまで貶められたものでしかない、とベンヤミンは考える。

身体と精神をそなえた個としての人間、ないしはそうした人間の意識へと関連づけて理解されるような経験、言い換えれば、認識が体系にもどづいて個別具象化したものとして理解されていないような経験は、いかなる種類のものであれ、やはり、この種の現実的な認識のたんなる対象にしか過ぎず、しかも、そのような認識の一分野としての心理学の対象にすぎない。<sup>(6)</sup>

我々は、いわゆる「経験的」という形容詞に注目せねばならない。

それについて、邦訳の訳者は、Erfahrung & empirisch の訳語に関して註を添えている。後者については、いわである。「経験的」と形容詞になった場合、それは、終始一貫してカント的な意味、すなわち、人間の感覚に基礎を置いた経験にかかるという意味で、「純粹」ないしは「超越論的」という概念に対立するものとして、いわば中立的にしか使用されていない。<sup>(1)</sup>しかし、Erfahrung と empirisch としていることで思い浮かぶのは、カントが『プロレーマナ』における「経験的判断 (empirisches Urteil)」を、知覚判断 (Wahrnehmungsurteil) へと絶対判断 (Erfahrungsurteil) に分けたことである。

知覚判断が単に主観的な妥当性しか持たないのに反して、経験判断は客観的な普遍妥当性を持つとカントはした。ベンヤミンの意図は、そうした「経験的」な意識、カントが最高次のものと看做したもののが、実はまったく貧弱なものに生り果てていることをアイロニカルに表現するに至ったのだろう。しかしカントの理論によつて、経験的主観が完全に還元されることは考へられていない。ベンヤミンはこう述べている。「事実カントは、とくに『プロレーマナ』に頗著なように、経験の諸原理を、諸科学とりわけ数学的な物理学から引きだそうとはしていただけれども、もともと彼にとつては、経験それ自体は、考へた数学的な物理学の対象世界に一致するとは考へられてはおらず、そのことは、『純粹理性批判』をみてもはつきりうかがわれるといふである」。<sup>(2)</sup>ベンヤミンが試みようとするの

は、いの本来カントに備わっていた筈の「永続的ではない」とされていた経験の尊嚴についての問い<sup>(3)</sup>の復活である。経験的主観は「観念論」によって還元し尽くされたかに見えたが（少なくとも認識論のレヴェルでは）、そこから抽出された超越論的主観にも、実はそれに尽きないものが潜んでいた。つまり、超越論的主観の純粹性は保たれないのだ。そこには経験的主観の残り糟が在る。経験的主観は貶下されるとしても、それが完全に抹殺されるわけではないのである。

いじでアドルノに戻つて、彼が経験の残滓について論述している箇所を見つけておこう。『否定弁証法』の次の1節は、「所与ではない客觀」と題されたパラグラフからの引用であるが、いじでの大意は先に我々が見たような主観の内の自己内他者としての「客観的なもの」の契機を浮上させることである。そこから認識論、並びにその流れの一つである経験論に議論は絞られる。いじではアドルノは、経験論の中にさえ「客観の優位」の一端を垣間見ている。素朴实在論を批判した経験論自身が「実在的」である」とになる (Vgl. ND188)。しかし、いじで注意せねばならぬのは、その題目からも分かるように、経験論における所与、つまり感覚データとしてのそれが「眞の」客観では決してないという点だ。

認識論の伝統に従えば、直接的なものは主観の中へと落ち込むのだが、それは主観の所与性、あるいは触発としての話なのである。なるほど主観は、自律的で自発的である限り、直接性に対する形

成力を持つている筈である。しかし、直接的に所与が端的にそこにあるという限りでは、主観はその力を決して持つていはしない。この直接的所与は、所与の形態の中にある種の客観的なものが抗って在り続ける (*widerstehen*) のと同様に、主觀性の教説——「私のもの」についての、つまりその所有物としての主観の内容についての教説——が基づく、根底に存立していぬもの (*Grunderbestand*) なのであり、いわば主観の中の客觀性的警告 (*Menetekel*) なのである。(ND 187)

つまり所与に頼らざるを得ないという点で主観の自立は脅かされるのである。そして所与は客観から抽象化されて「極限値」 (ebd.) にまで貶下されるのだが、それが在るという「その限りで、経験論は、諸々の事柄の感覺主義的還元にも拘らず、何らかの客観の優位を書き留めて」いるのだ。なんとなれば、「ロック以来、経験論は、感覺に由来しない、すなわち「与えられた」のでない意識内容など存在しない」とを主張してきた」からである (ND 188)。しかしそうした所与は、超越論的主観が経験的主観の抽象物であったのとちょうど同じく、「客観」の抽象によつてもたらされたものであり、「眞の」客観ではない。経験論の主観も客観も、「主観」への還元により確保されたものでしかないのだ。認識論の二大潮流であるカント的認識論と経験論は共に、主観への還元といふ点で一致するのである。

しかし、そのように残滓にまで萎んでいふとはいえ、それは確か

に残留しているというのがアドルノの態度である。そして、そうした沈殿物でしかない「客観」をもつて、アドルノは「客観の優位」を手探りする。経験論の中にさえ「客観の優位」を見るアドルノであるが、彼にとってより重要なのはカントとの対決であり、カント的な認識主観の優位を覆すことであつた。しかし、アドルノはカントにむけ「客観の優位」のモメントを見出している。そこで次に、アドルノのカント批判を基に、アドルノがカントの内に見ている「客観」を究明しよう。それによって、アドルノの目指した「客観の優位」、ひいては彼の呈示する「和解」というものがどういうもののかが浮き彫りとなるであろう。蔓延する超越論的主観(文化産業)、並びに対象構成的主観(カント哲学)への批判の果てに彼が辿り着こうとする地点を、そこで我々は見出すことになる。

#### 4. 「客観の優位」

超越論的主観に嵌入していける経験的主観は、アドルノによって、「客観としての主観」とも表現されている。そいやこの言い回しから、アドルノの議論を追つてゆこう。

アドルノは、超越論的統覚における「我れ思う」と「私の」との対比の内で次のように語つてゐる。

この「私の」が客観的なものの下の客観としての主観を指示示すのであり、またこの「私の」がなければ再び「我れ思う」が在り

得る」ことは決してないであらへ。Daseinという表現が——それは主観と同義である——そのような事情を仄めかしている。主観が存在するということは、客觀性から引き出されてゐるのである。」のことが、主観自身になんらかの客觀性を与えるのだ。subjectumが、つまり根底に存立しているものが、哲学の術語によつて客觀的と呼ばれたまさにそのものを想起させるのは偶然ではない。(ND 185)

主観が「(+)に在る」といふことが客觀性から引き出されるとは、「我れ思う」(超越論的主観)が「私の」(經驗的主観)から引き出されるとの謂いである。つまり、具体的な生き生きした経験において、主観は「眞の」客觀を経験していくのであり、そうした具体的な経験によってこそ主観は成り立つてゐる、というわけだ。だからDaseinには「何らかの客觀性」が備わつてゐる。主観が抽象的な普遍妥当的なものであるからというのではなく、それがここに在るといふ限りでそれは「客觀的」なのである。このようにアドルノにとっては、存在すると云ふことが客觀性を意味する。「主觀性は河流の仕方で「存在してゐる」のだという各々の主張はすべて、主觀が初めて基礎づけると称する客觀性をすでに含み持つてゐるのだ」(ND 186)。ここで彼の言う「存在してゐる」とはもちろん、觀念的抽象的レヴェルで言われてゐるのではなく、具体的経験を為すという意味での、実際に「(+)に存在してゐる」というレヴェルでの「存在してゐる」である。それ故にこの客觀性は、1. で我

々が見た「客觀性」(満場一致の事柄)とは區別されねばならない。このコンテクストにおける客觀性とは、「本質的に客觀性であるもの、すなわち存在者」(ebd.)のことなのである。つまり、先の客觀性は超越論的主觀的なものだと、この本質的な客觀性は經驗的主觀的なものだと言い替えられる。アドルノにとってみれば、主觀とは必然的に客觀でもあるのだ。主觀は、それ以外のものと隔離して独立して在るのではない。

(+)で、主觀—客觀という両概念についての哲学史上的解釈を振り返りつつ、アドルノの議論の補完としたい。アドルノがわざわざsubjectumとして言ふ方をしているわけが、それによって明らかになるだろう。

アドルノが主觀—客觀にこだわったのも彼の一つの思想的バック・グラウンドとなつてゐるベーゲル由来すると思われる。主觀と客觀とのそのダイナミックな変転を捉える視線をアドルノに与えたのはベーゲル弁証法であると言えるだろう。以下では、哲学史上の主觀、客觀という両概念の説明としてE・フィンクの『ベーゲル』を足掛かりにして議論を進めたい。

主觀(Subject)は本来、アドルノもそう述べてゐるよう、subjectumとして根底に在るものと意味していた。フィンクによれば、「存在者、物、実体がSubjectであり、subjectumである、…諸物において一定不変なもの、すべての変化を通り抜けて、その変化の根底にあるもの、つまりhypokeimenonそれがsubjectumであり、実体(Substanz)と同じである」。そして客觀の方は「もとより

はむしろ自我的なものを意味する——objectum<sup>(2)</sup>は自我にとって投げられたもの、自我に対置してあるものである」。

しかしこのような主観—客観の概念は時代と共に変化してゆく。

近代的な意味でのそれらの概念の確立のきっかけとなつたのは、キリスト教的世界解釈とデカルト哲学の登場であるとフィンクは述べている。すなわち、「キリスト教的解釈では、被造存在者、ens creatum<sup>(3)</sup>は他のものによっての存在者になり、己<sup>(4)</sup>の自主性、己<sup>(4)</sup>れの即自存在を失う。デカルトは有限な実体をres cogitans<sup>(5)</sup>考える実体とres extensa<sup>(6)</sup>延長せる実体とに分けて、己<sup>(4)</sup>の分割を不動の基礎へ還帰するところ<sup>(7)</sup>とて根拠づける。そしてこの搖るぎない基礎とはずカルトにとっては、どんな疑いのなかにあっても疑いえないものとして保持されるもの、すなわち自我の自己確信である。疑いのなさといふこの方法的な優位によつて、自我が際立つたヒュボケイメノンに、簡潔な意味での「主観（主体）」となる」。

この変化を通じて、元来、物（存在者）であった主観が自我的なものになり、自我的なものであった客観が物（存在者）的なものとなる。

フィンクによれば、「物」というものには——近代的意味での、つまり「客観」になるのだが——二つの側面がある。ひとつは普遍的なものとしての本質という面であり、もうひとつの面は個別的なものとしての事実性である。前者は概念把握可能であるが、後者は不可能である。何故なら、前者について言えば、本質というものがそもそも概念によって捉えられたものなのであり、「私の思考と同

種」だからである。後者については、それが「概念に抵抗して、ただ「発見され」、「経験され」、確認され、受け取られるだけ」のものだからである。

主観は存在するだけですでに客観である、とのアドルノの勧考は、主観の本来の意味——subjectumとして存在者であり、物である——から鑑みれば正当であることが分かる。そのような元々の意味が彼の念頭に在つたに違いない。「objectum<sup>(8)</sup>はsubjectumではない。しかし、subiectum<sup>(9)</sup>はobjectum<sup>(10)</sup>であらう」のなら話は別だ」（ND 181）。「観念論」が思いなしたのとは違い、主観がすでに客観であるならば、主観はもはやその全能を誇ることは許されない。且つ、フィンク<sup>(11)</sup>の物に在る二つの側面、つまり主観には概念把握する<sup>(12)</sup>との不可能な側面が、物=客観に在るのなら尚更そうである。

「」<sup>(13)</sup>で、我々は興味深い事態に立ち至ることになつた。それというの、アドルノと最も対照的な人物として名を挙げられること暫しである、ハイデガーとの意外な一致がここに存するからだ。ハイデガーにおいては、世界内一存在である人間は、道具的指示連関を通じて、日常的—実践的には常に既に「存在」に出会つてゐることになる。現一存在は、本来的には「存在」を「了解」しているわけである。こうした思想と、本性上存在者的なものであるが故に「客観」でもある主観というアドルノのそれには、図らずも共通点が存してゐるのだ。

「」<sup>(14)</sup>でハイデガーについて充分な論考を為すことはできないが、

ハイデガー以前にも、こうした「客觀」は哲学の主題であった。その代表としてカントの「物自体」という概念が挙げられるだろう。

カントもやはり、この客觀性の優位という契機を自らに思い止まらせて済ますことができなかつた。彼は理性批判において認識能力の主觀的分析を客觀的な意図から舵取りすると共に、頑強に超越的物自体を守つた。即ち的に在るものはある種の客觀の概念に端的には矛盾しないだらう、ということは彼には明らかだつた。  
…彼のもとでも主觀は自身の外へ達しないのに、やはり彼は他性の理念を犠牲に供しはしない。この他性がなければ認識はトートロジーへと零落するだらう。認識されたもの（といつてもそれは認識自身であろう。（ND 185）

このように物自体を確保する限り、カントの觀念論にも一抹の「客觀の優位」のモメントが内包せられていることになる。よく知られているように、カント哲学においては物自体の經驗的実在性は保証されている（もちろんその実在性も仮想体でしかないのだが）わけであり、経験を通して超感性的なものを「感じ」得るという点でアドルノは、物自体の「経験的」実在性というカントの教説に忠実である。しかしこのモメントはフィヒテ以来嫌悪され（Vgl. ND 190）、カントの後継者たる新カント派はそれを削除する方向に動いた。これを復活しようことに我々は、アドルノのカント批判の一面を見ることができる。そしてここから「唯物論への移行」

が始まる事になる。しかし、当面の我々の取り組んでいる問題にとって重要なのは、客觀に依存しなければならない主觀がその自立を脅かしているという点である。

一九六四年のH・マルクーゼの七〇歳記念の講演においてアドルノは、根源的統覚（超越論的統覚）と物自体という二つの概念を使って次のように語つてゐる。「見かけ上は非依存的なもの、つまり根源的統覚は、たとえ無規定的であっても客觀的であるもの——それはカントの体系では経験の彼岸の物自体に避難するものであるが——に対して依存」（GS10 601）しているのだ、と。しかし、アドルノが自律までをも棄てるわけではない。「自律的に、だがやはりその都度」といふに予め描かれた問題と接触するだけ避けてその問題を反省しながら、かの経験を確保することと」（GS10 605）、「これこそが哲学の使命であると彼は考へてゐるからだ。

哲学は経験を通じて「客觀の優位」に進み行く。「経験する主觀は、非同一性の中で消え失せる」とを日指す（ND 190）のである。つまり「客觀の優位」とは主觀が自立を棄てるところ「こと」であり、それは主觀が自らに命ずること（自律）によって為されるのだ。  
そしてこの「客觀」を言い当てたものとしてアドルノはカントからもう一例挙げてゐる。それは『第一批判』弁証論中の「純粹理性の理想」において、存在論的証明の批判としてカントが持ち出した有名な例である。カントは、デカルトが為したような「概念」からの神の「存在」証明に対して、現実の百ターレルと可能的な百ターレルという例をもつて反駁する。カントの説明はこうである。概念

上は「現実の百ターレルが可能な百ターレル以上のものを些かも

含むものではない」(A.599 B.627) が、現実上はこの1つでは事態はまったく異なるらしいのだ。存在論的証明なるものは、「自らの状態を改善するため、その現金残高にいくらかのゼロを付け加え」(A.602 B.630) ようとする商人のようなものであるとカントはその反論を締め括っている。

カントの論証は、神の存在を、神は無制約なものであるとの命題から引き出すことはできないという論点に限られたものである。それをアドルノは敷延して考える。客觀の実在は概念によっては説明し尽くせない。これをカントの論証は内含するとアドルノは言うのだ。「…想像上の百ターレルについてのカントの範例の論証力は、『純粹理性批判』自身の形式—内容の二元論に基づかり、更にそれを遙かに越える力を持つ。…概念も事實性も互いの補完のための付加物ではないのだ」(ND 189)。概念によって客觀の実在が掴めないばかりでなく、事實性といつてもそれは現象でしかないのだから当然、實在としての物自体(アドルノが言うところの客觀)ではない。「世界の中のいかなるものも事實性と概念から組成される、いわば足し算されるものではない」(ebd.)。概念と事實性が互いに補完し合っても世界の内の具体的「客觀」を解き明かすことはできないというわけだ。

更に、アドルノはこの批判が、プラトンにおける叡智界(この)では概念)と感覺界(同じく事實性)とによる世界の説明以来続いている、「觀念論」における、多様性と單一性による世界觀を突き破

るものであると論を進める (Vgl.ebd.)。

(1) で言られている概念は純粹悟性概念「演繹論」であり、事實性は現象「感性論」であろう。これをプラトンの叡智界(一なるもの)と感覺界(多様なもの)と等置し、存在論的証明の批判「弁証論」を足掛りにして、カントの理論構成自体に非同一性に向かい得る思想を見て取るというアクロバティックな議論遊びをアドルノはしている。このように恣意的に好き勝手に都合の良い箇所だけを取り上げているかのように見える議論に、我々は戸惑いを感じずにはいられないが、問題は概念(カテゴリー)をもつてしても「客觀」=非同一的なものを掴み上げることはできないし、その概念と現象を足し算しても答えは「客觀」=非同一的なものにはならないという)を、カント自身の存在論的証明の中にアドルノが読み取っていることだ。しかしあドルノが、彼一流の読み込みによつて、パラドキシカルなことにカント自身の内にカントを越える契機を掘り起こしたことだけが重要なのではない。そもそも物自体が不可知であることはカントも認めるところなのだから。我々にとってそれ以上に注意を払わねばならないのは、アドルノが非同一性をいうものとして捉えていたかが、ここに暗示されていることだ。つまり「客觀」=非同一的なものとは、概念と事實性によつては汲み尽くせないもの、叡智界と感覺界に代表されるような「觀念論」の問題構制<sup>(2)</sup>から「隠されているもの」なのである (Vgl.ND 189)。

しかしアドルノが、わざわざプラトンの例を挙げたのは、それが觀念論の問題構制の典型であるということなのだろうか。こ

う考えるにじんができないのではないか。」の例を引合いに出すにじんよりて、アドルノは非同一性がどうじゅものであるのかを、これと異なる形で我々に教えてくれているのだ、と。観智界と感覺界の例はカテゴリーと現象に対比するためばかりではなく——存在論的証明の批判が「純粹理性の理想」において説かれてくることを考えれば分かるように——、真理とその模写という模写説にも関わって用いられているのではないか。つまり、觀智界と感覺界とは分断したものであり、真理とその模写という対立図式で表わせるとのプラトンによる世界理解を、理想（カントによれば一切の現象のプロトタイプであり、「一切の可能性の総体」(A.573 B.601) である）とその派生物（プロトタイプである理想の模写）というカントの思想と等置してもいいという風にである。」のような解釈が許されるない、」にアドルノとカントの近接性を読み取ることができるかわしけない。一切の現象の原型であり、一切のものはその模写であるにも拘らず、主觀が掴み上げるにじんのできないものとカントによって定義づけられる理想。経験を通じて接触していながらも主觀には「隠されたもの」にとどまるアドルノが構想した非同一的なもの。しかしもちろんこの両者は同一視されはならない。何故なら、カントの理想といふのは「はるか遠く客観的実在性から隔たった」(A.568 B.596) ものなのであり、アドルノの「非同一性」はまさに実在的なものであるからだ。<sup>(8)</sup> こう考えるとプラトンを持ち出すとの意味が見えてくる。つまり、それによってアドルノは、非同一的なものが、そうしたカント的理念——理想とは個別的な理念であ

る (Vgl. ebd.) ——の意味での「理念」とは決して取り違えられてはならない。(Vgl. ND 189) 「」と「」とを指摘しているのである。

」に二つの解釈が可能であることが明らかになった。恐らくアドルノはこの両者を共に意図的に組み合せているのであらう。」のと二つの解釈が可能であることが明らかになった。恐らくアドルノはこれを整理しておく。前者の解釈の力点は、純粹悟性概念「演繹論」に置かれる。それは、概念によっては実在を捉えることができるという存在論的証明の批判を、カテゴリーでは客觀が掬い上げられないことに置き換えるのである（」ではプラトンの例は消極的な意味しか持たない）。後者の力点は、理想「弁証論」に置かれる。それは、プラトン的イデアとカント的理點とをパラレルなものと看做すものである（プラトンの例を敢えて取り上げた理由は」に存する）。」の解釈に応じて非同一的なものにも二様の説明が為される。前者においては、それは観念論の理論構成から「隠されたもの」である。後者においては、それは観念論的「理念」とは同一視されはならないものである。「非同一性は「理念」である」とは決してなく、ある隠されたものなのである」(ebd.) のアドルノのテーゼは、」した二つの解釈を経て初めて理解できるものであろう。

」のように「客観」は主觀の知り得ない原因であり、それ自身は主觀の能力によって構成することができない（現象としてしかそれは対象ではないのだから）ものであるとアドルノはカントは考える。それではいかにして主觀は客観と関わるのか。アドルノは、主觀は

客観に己が身を委ねなければならないと云う。彼は「の身を委ねる」ということをヘーゲルの「zusehen」へということでもって説明している。「主観は現実には客観を『ただ眺めやら』ねばならない。それというのも、主観は客観を創造するのではなく、認識の格率とはその傍らに立つ」ということだからである」(ebd.)<sup>(8)</sup>。つまり「客観の優位」というのは、主観の客観に対する依存性に直面し、客観=対象を構成するのではなくその「傍らに立つ」だけで満足しなければならない」ということである。

何故アドルノが、対象を構成する主観という「観念論」の主観概念を忌避しようとしたのかといふと、対象の構成ということに彼が暴力的な契機を見たからである。なんとかして非暴力的に対象と関わる道がないものか、在るとすればそれはどういうものか、まさしくそれを探ろうとしたところに、アドルノの視点は置かれていた。その解答こそが、我々がここで見てきたような「客観の優位」なのである。主観は、「観念論」が思いなしたように、自立したものではない。「観念論」は客観=対象を構成すると考えるのだが、実はそこから溢れ出るものがあり、それに気付くことにより、観念論的「主観の優位」は唯物論的「客観の優位」に反転してゆく。そこで主観はただ客観の傍らに立ち、それを眺めるだけである。哲学とはこののような姿勢を保たねばならないとアドルノは考えた。

## 5. 結語

ここに、主観、客観、経験という三つのアドルノ読解のキー・ワードを我々は手にしたことになる。しかし、現代の様々な思想が提起している問題は、主観=客観の図式よりも、言語や身体などといった主観と客観を媒介するものへの転換を呼びかけるものである。この点、確かにアドルノが主観=客観という図式を固持するために、時代遅れの誇りは免れない。だが、この媒体に注目する考えが出来たのも、近代的自我の崩壊を目の当たりにしたからであった。それで、たとえ主観=客観という二項対立図式を用いていても、アドルノの目論見が、独立した主観なる僭称を覆すことにはいたとするなら、この現代的な問いと核心部分では共有する点があると言えるであろう。また、本稿で明らかになったように、アドルノ自身の用いる主観=客観が互いに入れこになつておらず、単なる一分法では決してないのであるから、それを近代的な主観=客観図式として簡単に片づけられないことも明らかである。アドルノ自身は内在的批判として、観念論の使用する二項を存分に使いこなし、内から掘り崩しを図つたのである。彼の主観哲学批判、並びにそれと平行して繰り広げられる文化産業批判は、その根底に在る「主観への還元」批判という点で、つまり主観に尽きないものが主観には在る——客観にも同じことが言えるのだが——ということを主観という概念を用いて内在的に批判してゆくという姿勢において、現在でも尚、有

効であると言えるのではないだろうか。

以上見てきたようにアドルノの哲学は、客観の優位という点では、すべてを絶対精神に回収してしまって一ゲルよりも、物自体という

カントの構想に近接性がある。他方、認識を超えた論的主觀の内部に限定する静態的なカントの理論哲学よりも、動態的な一ゲル弁証法に抱るところが大きい。主觀、客觀、経験のみならず、カントや一ゲルに向かい合って見せるアドルノの複雑な態度を我々は見究めねばならない。彼の著作を読む際には、「その度」とに対象に従事するところ「苦行」(ND 171) を引き受けねばならないのだ。そうして初めて、彼の「やくわくしたる」が見えるやうである。

## 注

本文中の引用の指示は以下のようにある。

- GS: Adorno, Th.W., *Gesammelte Schriften* — 卷数と頁数を記す。  
ND: Adorno, Th.W., *Negative Dialektik* (Bd.6 der GS) — 頁数を記す。  
DA: Adorno, Th.W./Horkheimer, M., *Dialektik der Aufklärung* (Bd.3 der GS) — 頁数を記す。徳永恒訳『啓蒙の弁証法』岩波書店  
一九九〇年。  
MM: Adorno, Th.W., *Minima Moralia* (Bd.4 der GS) — 節番号を記す。  
[[米漢訳『ミニアトマリア』法政大学出版局、一九七九年。  
PS: Adorno, Th.W.u.a., *Der Positivismusstreit in der deutschen Soziologie*, Frankfurt am Main 1989 — 頁数を記す。  
城塚・浜井・遠藤訳『社会科学の論理』河出書房新社、一九九一  
年。

カント『純粹理性批判』からの引用は版と頁数を記す。

本稿は、修士論文「無限への憧憬」(平成6年度大阪大学) II章に手を加えたものである。

\*

(1) 「社会科学の論理によせて」には次の記述がある。

「体系と個別性とは相互連関的であり、ただ両者の相互連関性においてのみ認識され得るのだ」(PS 127)。

(2) 「これは、『事態は、命題をいくつか結びつけた輝ける体系的統一』にして反抗するものである」(PS 126)、「座標系を自由に選択できると想定する」とは、客体の偽造へと転化する」(PS 128)、等々といふ言葉で示される。

(3) 「一チヨによって背面世界論者の弄み概念たとして罵倒されたWesen」そしてその相對物であるUnwesenへどう対概念をアドルノは確保し続けようとするわけである。しかしWesen(伝統的に

は、理念の)とあるのとされる)へUnwesen(同じくそれの模写でしかない)へと二分法を用いれば、直ちに觀念論への退行とはならないだろうか。同様の嫌疑が、「全体性的神話」に弁証法理論が囚われているとの批判によって、その全体性概念についても掛けられているのだが、これに対しアドルノは、実証主義科学の方が弁証法理論よりも觀念論的だと反論している。すなわち、「觀念論に対する勝者であると自負している実証主義的諸理論は、批判理論よりずっと觀念論に近く」、それと「のものそれが「認識主觀を实体化」、つまり「すべての妥当の、科学的制御の知性界として認識主觀を实体化」(PS 12) してからである、とある。

(4) これがした從來の哲学の主流流をアドルノは「のやきやむべりの形而上学(Guckkastenmetaphysik)」と呼んでくる。『否定弁証法』

じ次の記述がある。

「西洋の形而上学は、その異端を除いては、のぞきからくりの形而上学であった。主觀…は、そうした形而上学によって、永遠の間それ自らの神格化に対する覗として自らの由口の内に閉じ込められた。堵の鉢眼を通して見るかのように、主觀は観念あるいは存在という星の掛かっていふ漆黒の天球を覗き見るのである」(ND 143)。

(5) 「れに「てば、例えは「想像力の委縮」云々」とが挙げられてゐるであらう。『啓蒙の弁証法』には次のような記述がある。Die

Phantasie verkümmt.(52); Die Verkümmernung der Vorstellungskraft und Spontaneität... (148); Die Einbildungskraft (ist) verdrängt.(ebd.)

また、そねに絡んだ問題として、アペティアを挙げるのもやさず。カントにおいて義務とされたアペティア——それは感情や衝動等などの理性による克服なのであるが——は、アドルノにて見れば生き生きとした経験の抑圧に繋がる。彼は『啓蒙の弁証法』において、ジャコバッテの「自己調練」(115) や「良心の呵責からの自由」(ebd.) へパラレルに、カントのアペティアを論じてゐる。

(6) 静力学と動力学との対比については以下を参照されたい。Vgl.

Über Statik und Dynamik als Soziologische Kategorien (GS 8)

(7) めでろん「眞の」主觀の解説、そしてそれに伴う「客觀の優位」の究明に必要なのは経験にともないない。想像力、身体(の受苦)、記憶(想起)などがそれである。本稿はカント的「重体としての主觀に焦点を絞った関係上、「経験」というモメントだけしか取り上げる」のがでもなかつた。」これは今後の課題とした。

(8) アドルノの議論におけるA=AとしてS=Oという意味である。

つまり同一性の哲学における対象は予めカテゴリーを介して構想されたものでしかないというのである。客觀=対象は、主觀が作り出したものなのである。同一性の哲学において Objekt とされるのは、抽象化された、自分と等しくなつたものだけである。

(9) 本文はこうしたものである。「ア・プリオリな諸純粹概念があるなり、それらは、なるほど何ひとつとして経験的なものを含みえない」といふは言うまでもないが、それにもかかわらず可能的経験のア・プリオリな純然たる条件でなければならず、「この可能的経験が、それらの諸純粹概念の客觀的実在性がそなのみにあどづかうるのにほかならぬ」(eine mögliche Erfahrung..., als worauf allein ihre objektive Realität beruhen kann)」(傍点引用者)(A.95)。

ア・プリオリな純粹悟性概念の客觀的実在性が可能的経験に基づくとは、あくまで表明されるわけだが、カントの本意としては「可能な経験と連関しないア・プリオリな概念は、概念のための論理的形式」(A.95) でしかないという洞察からの発言なのであり、すべての経験の根底にはア・プリオリな条件として純粹悟性概念がひそんでいる(A.96) ところとの表現なのである。しかし、この言を真に受けるなり、最終的なカントの結論が超越論的統覚と生産的構想力が連関して初めて認識が可能になるというものであるにしても、可能的経験なしには我々はそれらのア・プリオリな条件を知り得ないし、パラドキシカルなことに、可能的経験によつてこそ超越論的統覚と生産的構想力の客觀的実在性は保証されるとなりはしないか。そう言つても、歪曲すること甚だしいカント理解であると非難されることはないと思われる。可能的経験こそが、そしてそれを経験する経験的主觀こそが超越論的主觀を支える「眞の」主觀なのである。」に(しかもカント自身の言葉によつて)超越論的主觀の脆さが露呈されてゐる。

- アドルノによる『第一批判』の読解はB版の問題構制しか取り上げていいようと思える。A版を解説する)と我々は、アドルノ自身の気がかなかった、カントとの近接性をそこに見出し得るかも知れない。しかし、そうした早計な判断は避けるべきであろう。この問題に取り掛かるためには、カントのみならず、アドルノとは因縁浅からぬハイデガーの『カント書』にも手を出せばならない、現時点では十分に論ずることができない。これは今後の課題とした。
- (10) 「真理における非同一的なものとしての客觀」として書いた方をアドルノは「主觀と客觀について」で論じてゐる。Vgl. GS10 S.753
- (11) M・ショイム、アドルノがその内在批判の不十分性を補うたために必要とした超越的支点の「へんし」「経験」を取り上げてある。Jax, M., Adorno, Cambridge 1984 p.117 (木田元・村岡晋一訳)「アドルノ」筑波書店、一九八七年、一七八頁) 参照。
- (12) Többicke, C., *Negative Dialektik und kritische Ontologie*, Würzburg 1992 S.48
- 尚、アドルノにおける経験概念についてばかりでなく、彼のテクストにおける主觀の「重性」についても本書の議論は大変参考になつた。
- (13) 1)の論文のタイトルは、カントの『ねむねかれて』現われ得る際の将来の形而上学のための「ローティメナ」の変奏となつてゐる。
- (14) Benjamin, W., *Gesammelte Schriften* II-1, Frankfurt am Main 1977 S.161 (道標叢書「来たるべき哲学のアロハバ」『来たるべき哲學のアロハバ』晶文社、一九九一年、一〇一頁)
- (15) A.a.O., S.159 (邦訳、九七頁)
- (16) A.a.O., S.162 (邦訳、一〇一頁)
- (17) 『画論』 一一八頁

- (18) Benjamin, W., A.a.O., S.158 (邦訳、九五頁以降)
- (19) A.a.O., S.158 (邦訳、九五頁)
- (20) Fink, E., *Hegel*, Frankfurt am Main 1977 S.193 (加藤精訳『ベーゲル』国文社、一九八七年、一八一頁)
- (21) A.a.O., S.194 (邦訳、一八一頁)
- (22) A.a.O., S.194 (邦訳、二八二頁以下)
- 1)では哲學史のレヴェルでは、スピノザ主義とカルト主義という二つの潮流で説明できるであらう。スピノザの汎神論によれば、唯一の実体は神であり、主体は單なる「偶有性」でしかない。テカルトにおいては主体も実体である。
- (23) A.a.O., S.196 (邦訳、二八五頁)
- (24) Ebda.
- (25) 1)の「対象と接触する」とをやむだけ避けながら対象と関わるかわらべその関わり方は、Konstellation——それは元々ベンヤミンのタームなのであるが——としてアドルノによって表現されるのである。それは、彼が言語に模して次のように語つている1)の内でよく書いたとある。
- 「言語は、認識機能にとっての単なる記号体系を差し出してくるだけでは決してない。言語が本質的に言語として現われる限り、描写となるといふのは、言語は1)の諸概念を定義しない。」
- 言語はそれらの概念にその客觀性を得させるのであるが、それは、ある事柄に中心を置いて、言語が据える諸々の概念の関係を通じ

てなのである。…ただ Konstellationだけが、外部から、概念が内部において切り離してたものを、つまり、概念ではかくありたしと希いつつも、そうあることができない剩余を表現するのだ。諸概念は、認識され得るであろう事物の周辺に群れ集う」とよって、潜在的にそれの内部に在るもの規定し、思考が必然的に「己れ自身から削除したものを思考しながら手に入れる」(ND 164f.)。

こうした思考は——それは「像を欠いた唯物論」という言葉にも端的に当てはまるわけだが——ユダヤ教の「偶像化禁止」の命令に対応して生まれたのであろう。ユートピアを求めるにしても、決してそれを偶像化してはならないのだ (Vgl. ND 207)。

これは余談だが、こうしたアドルノの偶像化による偶像崇拜に対する嫌忌について前出の Többicke が、「英米の皮肉家たち」のエピソードを紹介している。それはこういったものだ。「嘲弄家たちはこう言い囁く。諸々の概念の実体化すなわち偶像化や崇拜（英語では、adoration）に対するアドルノの批判は彼の名前と連関しへじるのだ、♪。英語の発音はそれらむつたりゆく。『Adore? No!』」(Többicke, C., A.a.O., S.58)。

(26) こうした純粹精神の圏域と現実との対置こそが観念論のポジションへとある。Többicke の言及がある。Vgl. Többicke, C., A.a.O., S.112

(27)

「主觀と客觀につれて」には次のような記述がある。「非同一的なものは、脱魔化された觀智界の遺物では決してなく、感覺界よりも実在的である」(GS10 753)。

(28)

›zusehenへ（観望）は『精神現象学』におけるヘーゲルのタームであるが、ここで述べたようなアドルノの思考と非常に近い考え方をしているのは、A・コショウガのヘーゲル解釈である。す

なわち、「弁証法は、ヘーゲルにおいては、思惟や叙述の方法とはまったく異なつたものとなつてゐる。或る意味で、彼は哲学的方法としての弁証法を放棄した最初の人間であるとするには可能である」(Kojève, A., *Introduction à la lecture de Hegel*, Paris 1974 p.455 上妻精・今野雅方訳『ヘーゲル読解入門』国文社、一九八七年、二五八頁)。「弁証法」は対象を思惟したり、叙述したりするのではなく、その「傍立」のやである。

(尚、本稿での引用は邦訳のあるものはそれを使用させていただいたが、文意上、一部変更した箇所もある)

1974 p.455 上妻精・今野雅方訳『ヘーゲル読解入門』国文社、一九八七年、二五八頁)。「弁証法」は対象を思惟したり、叙述したりするのではなく、その「傍立」のやである。

## **Subjekt, Objekt, Erfahrung**

### **— Zur Tragweite der Philosophie Adornos**

Makoto KAWAHARA

Der Kritischen Theorie Adornos wird oft ihr elitärer Charakter vorgeworfen. Dabei wird im Allgemeinen auf Adornos Ausführungen über die Kulturindustrie Bezug genommen. Sogar wird als Argument für den obsoleten Charakter von Adornos Theorie die Tatsache herangeführt, daß er sich bloß innerhalb des von ihm gesetzten Rahmens von Subjekt-Objekt-Problematik bewegt. In der vorliegenden Abhandlung möchte ich mich gegen dieses landläufige Adorno-Verständnis wehren.

Die Quintessenz der Kritik der Kulturindustrie liegt nicht nur in der Zeitdiagnose Adornos. Seine Ausführungen basieren auf einer subtil-dialektischen Aufdeckung der Problematik, die sich aus >Aufklärung< ergibt, die sich von Kant bis zum Positivismus erstreckt. In diesem Zusammenhang wird auf den von Adorno aufgedeckten Doppelcharakter in der Kantschen Begründung des transzendentalen Subjekts eingegangen. Damit versucht Adorno eine Dechiffrierung von Kant, die andeutet, wie man den sogenannten Vorrang des Subjekts aufsprengen kann.

Die Gedankenführung von Adorno ist bekanntlich äußerst komplex und nur mühsam ablesbare. Ich beschränke mich deswegen darauf die angedeutete Thematik anhand des Begriffs >Erfahrung< zu entfalten. Denn gerade in diesem Erfahrungsbegriff hat Adorno mit eigentlich mehrdeutiger Diktion den >Vorrang des Objekts< erfahrbar und die Möglichkeit der >Versöhnung< spürbar zu machen versucht

#### **Key Words**

Th.W.Adorno, Subjekt, Objekt, Erfahrung, Kulturindustrie